

人間科学研究 第33巻第1号 61–71 (2020)

原 著 論 文

カタルーニャの人間の塔 (Castells) を「支える」スタッフの活動と勧誘システムの民族誌 —チーム「サンツ」(Castellers de Sants) を事例に—⁽¹⁾

竹 中 宏 子

An Ethnography of Catalanian Human Towers (*Castells*) Supported by Social Staffs and a Recruiting System: the Case of *Castellers de Sants*

Hiroko Takenaka

(Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : November 18, 2019 ; Accepted : January 30, 2020)

Abstract

Castells, or human towers, are a cultural practice and one of the best-known traditions of Catalonia, Spain. This paper examines why and how people build higher human towers, even though it is theoretically impossible to construct them using human beings, based on anthropological fieldwork. The *Castellers de Sants*, a group of human tower builders from Barcelona, is taken as a case. Technical skills are very important to the successful construction of human towers; however, we will concentrate on the social aspects of *Castellers de Sants* to capture the mechanism or sustainable system they use to continue building higher and more difficult towers.

Through this investigation, we uncover the crucial characteristic of the *Sants*, which is a familiar and friendly atmosphere that may be the main attraction of the group itself. This characteristic is created and transmitted not only by their technical team staff but also by their social staff, which functions as a sustainable system to continuously gain new members. We also elucidate the mechanism of the “grey shirt,” a symbol of official builders of the group that increases newcomers’ motivation to train. A grey shirt cannot be bought but must be obtained in exchange for time and effort.

Finally, we point out that this system and mechanism contribute to the building of high-level human towers, which require concern for safety as they can reach over 10m.

Key Words : Human Tower, Traditional Culture, Social Organisation, Recruiting System, Catalonia.

1. はじめに

スペイン中央政府との対立が激化し、独立の機運

が高まるカタルーニャ地方で、現在最も象徴的な
伝統文化は「人間の塔 (Castells)」といっても過
言ではないだろう⁽²⁾。人間の塔とは、人の身体が

塔のあらゆる部分となって高く積みあげられるパフォーマンスであるが、近年、カタルーニャを象徴するようなイベントには必ずと言っていいほど登場し、観衆の目を引く。現在では日本でもニュース番組などで、特に「カタルーニャの日 (Diada)」(9月11日)のデモ中に人間の塔が建てられている⁽³⁾ 様子が取り上げられる。本研究ではこの人間の塔がどのようにして上手く建つのかについて、筆者が人間の塔チーム「サンツ」で行ったフィールドワーク⁽⁴⁾を基に、主に社会的な側面から考察していく。

人間の塔は人が人を支える形で成り立つものであり、人が積上がる技術や構造に目が行きがちである⁽⁵⁾。実際に練習を積み重ねる必要があり、あるポジションでは担当メンバーの能力が必要とされる。しかし、人間の塔はあくまでチームとして成り立っていて、技術的な指導をする者と、組織としてうまく機能するようにサポートする者との両輪で運営されているのである。ボランタリーアソシエーションとして運営されるサッカークラブやバスケットボールクラブのようなもので、技術スタッフと運営スタッフのどちらかが機能しなければ、クラブ全体が機能しないことと似ている。したがって本研究では、事務的なスタッフとして間接的に人間の塔を支える人々の様相を捉えたい。そしてそこで捉えられる人間の塔を支え維持するシステムや仕掛けを、特に勧誘活動に着目しながら考察する⁽⁶⁾ことを目的とする。

ここで人間の塔に関する概要を説明しておきたい。人間の塔の起源は諸説あるものの、一般的にはカタルーニャの南に位置するバレンシアで踊られていた「バレンシア人の踊り」から派生し、最も古くはバイス (Valls) の祭りで1791年に実演された記録が残る伝統行事である⁽⁷⁾。元来、カタルーニャ南部限定の伝統文化であった人間の塔は、カタルーニャ中で多くのチームが設立された1990年代に、伝統的な人間の塔文化の地域とそうでない地域の差が事実上消滅し⁽⁸⁾ (Botella, 2018, p.314)、正にカタルーニャを代表する伝統文化の地位を獲得した。2010年にはUNESCOの世界無形文化遺産に登録され、その人気と知名度はカタルーニャ地方のみならず、スペイン国内外に広がっていった。

人間の塔はチーム (colla)⁽⁹⁾ ごとに建てられる。

一見すると人間ピラミッドと同じものと捉えがちであるが、その構造は非常に複雑で、一つの塔を建てるには様々な体格の人というパーツが必要になる。したがって、子供も含めて老若男女、誰でも関わるができる文化行事である。塔は、基本的に3つの部分に分かれていて、下からそれぞれ、「ピーニャ (pinya: 松ぼっくり)」、「トロンク (tronc: 幹)」、「ポム・ダ・ダル (pom de dalt)」と呼ばれる (図1)。ピーニャは土台部分で、必ず円形につくられ、塔が高ければ高いほど大きなピーニャが必要となる。2段目に小型のピーニャにも見える「フォーラ (forle)」, さらにその上の3段目に「マニージャス (manillas)」が乗る場合があるが、その時ピーニャは「ソカ (soca: 切り株)」と呼ばれる。最上階3段を指すポム・ダ・ダルは、3段目は2人が位置する「ドスス (dosos)」, その2人を跨いでかがんだ姿勢を保つ「アクチャドル (acotxador)」⁽¹⁰⁾、そしてアクチャドルを跨いだ瞬間に空に向かって投げキスをするように手を挙げる「アンチャネータ (enxaneta)」によって構成される。アンチャネータの仕草、つまり手を挙げた瞬間が塔が積上がった印とされる。このポジションは子供の役割だが、人間の塔ではこうした子供を「いたずらっ子」を意味するカナリーヤス (canalles) と呼んでいる。

メンバーは全員、襟付きのシャツに白いズボンと腰巻を身に纏っている。腰巻はどのチームも黒色だが、シャツの色はチームカラーが採用される。スカーフも手に巻き付けたり、腰巻の上に巻いたり、ある



図1：人間の塔の基本構造
(出典：Almirall 2011)

いは髪の毛が邪魔にならないように頭に着けている(図2)。

メンバーから見れば「本番」となる人間の塔の実演 (actuació) は、通常、招待者である町村や街区の中央広場で3チームの間で行われる。主に町村や街区の祭り、その他のイベントに登場し、3種類の塔を建て、その前後に1本の柱のみのピラール (pilar) を建てるといった流れで実演が行われていく。実演の際には、必ず各チームに伴われる音楽隊が決まったメロディを最適なタイミングで奏でる。普段は練習の場を異にしている音楽隊と人間の塔メンバーが一緒に行動するのは、実演の場なのである。



図2：人間の塔メンバーの出で立ち（チームカラーのシャツ、白色ズボン、腰巻、スカーフ）（2018年9月・筆者撮影）

2. 人間の塔チーム「サンツ」の概要

本論文で扱う通称「サンツ」（正式名称：Castellers de Sants）と呼ばれる人間の塔チームは、カタルーニャの首都バルセロナに存する10のディストリクトの一つ「サンツ＝モンジュイック（Sants-Monjuïc）」で最も南に位置する街区 (barri) を本拠地とするチームである（図3）。その名称からわかる通り、サンツは街区の隣人組織 (associació de veïns) と関係が深い。サンツ街区は、グラシア街区などと並んでバルセロナの中で街区への帰属意識が高いことで有名だが、それにはいくつかの理由がある。一つは、サンツ街区がバルセロナ市を形成する一つの街区としてみなされている現在とは異なり、19世紀末まで独立した一つの「町 (pueblo)」だったことである。2つ目の理由は、当時、当街区には大小の工場が立ち並び、中でも繊維工場はカタルーニャ州最大規模のものが稼働していたことに起因する。バルセロナにおける繊維工場あるいはその他の工場を含めた「工業（小）地帯」としてサンツ街区は知られるようになり、多くの住

民も工場労働者であることが街区を象徴する特徴ともなっていた。

工場労働者＝住民たちは、彼らの労働条件や生活の質を向上させるために日々協力する環境にあった。カタルーニャには元々、ハイキング愛好者の集まりを中心としたアソシエーションイズムが19世紀後半に隆盛し（竹中, 2014, p.35）、その後も、フランコ政権下で集団化が困難な時期もあった⁽¹¹⁾が、公私のアソシエーションをつくりやすい環境は引き継がれていった。インフォーマントの言葉を借りれば、「カタルーニャでは、人はすぐに集まる」「カタルーニャ人は集まるのが好き」なのである。やはりアソシエーションの一つである人間の塔チームは、1990年代に設立ブームを迎える。この時期に設立されたチームの特徴は、それまでのように人間の塔に肩入れするような、一般に「若い」とは言い難い人々によってではなく、彼らの助けを借りながらであっても若者の主導によってチームが運営されるようになった点である（Botella, 2018, pp.313-314）。また、1968年から1992年までに結成された37の人間の塔チームは現在まで18しか残っていないが、1993年から1999年に設立されたチームは全て現存していることから、チームが継承の問題を克服し、組織として強固につくられている点を読み取れる（Botella, 2018, pp.313-314）。人間の塔チーム「サンツ」は、このようなブームの最中、他の同様のチームと同じような特徴をもって、



図3：バルセロナのディストリクト
(出典：<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=3390681>)

1993年に設立された。現在では、難易度が高いとされる9段の塔を建てられる実力をもち、隔年開催の人間の塔コンクール (Concurs de Castells) 最終日に招待される上位12チームにほぼ毎回入っている。

ある程度名が知れた人間の塔チームは、あだ名で呼ばれる。サンツの場合、彼らの「たまり場」でもあり事務所としても使用する集会所の名称 “Cal Borinots” に由来し、「ボリノッツ (Borinots)」と呼ばれている。ボリノッツは、「(ハエや蜂のようにブンブンと羽音を出して) 煩く飛び回る虫」を意味し、創設者たちは自らをそんな風に定義していたのである。サンツのシャツの色は灰色であり、これは住民である多くの労働者たちが着ていたシャツの色に由来し、工場地帯だったというサンツ街区の特徴を表象している。サンツの集会所は、今ではバルセロナの中心地の一つに数えられる鉄道のサンツ駅のすぐ近くに位置し、練習はそこから数十メートル離れた小学校の体育館で行われる。

サンツの練習は、バルセロナの他のチームとほぼ同じく、基本的に週に2回行われ、活動期間を3月～11月半ばぐらいまでとしている (ただし7月半ばから8月末までの夏休み期間は活動停止)。週2日の練習は火曜日と金曜日に行われ、それぞれ練習時間の内訳が異なる。火曜日は「全体練習」が20時頃に始まり22時頃に終わることになっている。金曜日には21:30頃に始まり24時頃終了することになっている。公式にはこういった全体練習の前に1時間から1時間半ほど見習い学校のような、サンツに入って間もない者や、上に上るスキルを磨きたい者のための練習時間 (以下、このような場を「自主練⁽¹²⁾」と呼ぶ) が設けられていて、最上階に上る子供たちの練習は火曜日の19時頃から始められることになっている。しかし実際には、子供たちの練習は金曜日にも行われているし、自主練も夕方19時頃には始まることが多い (図4)。開始時間に全員が集まるわけではなく、各自が来たい時間あるいは可能な時間に参加したい練習にバラバラと集まる感じである。このような誰がいつ来るのかわかりにくいメンバーの出欠管理の状態がずっと続いていた。

2018年から練習への参加はスマホのアプリケーションを使って事前に知らせることになった⁽¹³⁾。

出席者は体育館に入ったら、タブレット端末に名前を入れ、「出席」ボタンを押して自分が練習に来ていることを知らせる。この出欠は、全体練習の際に必要な情報となる。「ピーニャ」「トロंक」「ポム・ダ・ダル」のそれぞれを率いるテクニカルチームのリーダーたちが、その日そこに集まったメンバーを、アプリケーションを通して把握し、各自のポジションを決定しアプリケーションに上げる。全体練習では、その日どのような塔を練習するかが、チームリーダーあるいはテクニカルチームの誰かによって、自主練には使わない体育館の側面の壁に貼り出される (図5) ので、出席者は貼り出された練習メニューとアプリケーションの情報を参照しながら該当する塔での自分のポジションを探し、その位置につく (図6)。こうして現在ではテクノロジーを駆使しながら効率よく練習が進められている。

広場で披露される実演は、ほぼ日曜日か祝日に行われる。日程は年間を通じて大きな変化はないものの、正式なメンバーになれば毎月Eメールでその月の実演に関する情報が知らされてくる。まだ「見習い中」の準メンバーであってもチームのHPを見れば、実演場所と時間および集合場所と時間が載せられる。その時に就くべきポジションも、練習時と同じように携帯のアプリケーションを通して知らされる。ただし、練習の時のように出欠を確認する手段は口頭でしかないので、自分のポジションがアップされていないことも多く、その場合はリーダーにその状況を申し出るか、自分で空いた位置を探し塔の一部を形成することになる。



図4：自主練の様子。子供だけの練習 (手前)、壁づたいに設置されたバーを使った自主練 (左)、本番で塔を建てるメンバーによるもう少し高度な練習 (右) が同時に行われている。(2018年3月・筆者撮影)

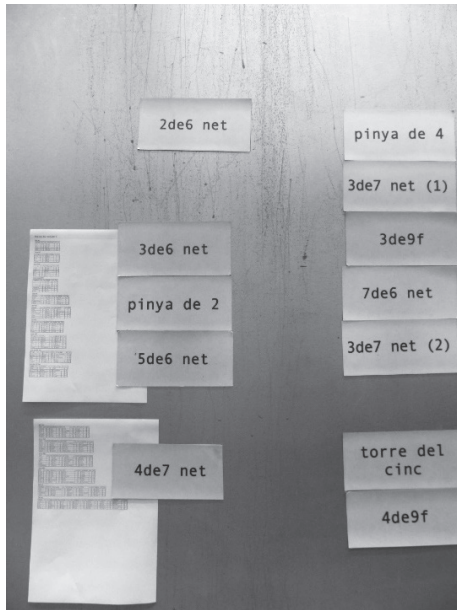


図5：張り出されたその日の練習メニュー（2018年3月・筆者撮影）

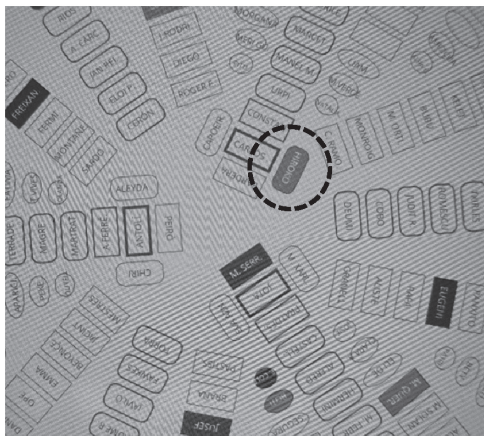


図6：携帯のアプリケーションに記される各自のポジション。点線で囲われているのがその日・その塔での筆者のポジションで、実際には自他が色で識別されている。

3. 人間の塔を「支える」スタッフ

本番の実演を成功させるには、毎週2回行われる練習が鍵となることは想像に難くないだろう。前節で見てきた通り、サンツには技術面を担当するテクニカルチームがあり、部位ごと（ピーニャ、トロンク、ポム・ダ・ダル）に配置を決めるだけでなく、自主練も運営する。テクニカルチームにはその他に、一本の柱のみを建てる「ピラール (pilar)」の技術に特化した練習の機会を設け、その練習を介して誰を配置するかを決定する担当者もいる。バラバラと人が集まり何となく始まり進行していくサンツの練習

を見学すると、誰がどこで何の練習をしているのか把握しにくい、実際には段階的および組織的に練習が組まれていて、多くの指導的役割のメンバーの下で練習が行われているのである。

加えてサンツにはチームの社会的側面を担い、人間の塔を間接的に支える担当スタッフもいる。彼らも重要な役割を担っている（図7）。スタッフが担う仕事は大きく3部門に分かれていて、「街区」、「渉外」、「事務・管理」である。各部門には責任者 (president) がいて、テクニカルチームのリーダー (cap de colla) と連携しながらチーム運営を円滑に回していく。一つの部門には更にいくつかの係が設けられていて、そこにもそれぞれ責任者がいる。係の責任者を中心に担当スタッフ数名がそれぞれの仕事に携わっている。部門および係の責任者は話し合いの場に参加しなければならないばかりではなく、スタッフとしての仕事も他のスタッフと同様に実際に行うので、こうした役を引き受けるとかなりの時間と労力を取られることは容易に想像ができるだろう。任期はテクニカルチーム同様、2年と決まっているが、再選もあり得る。

こうしたスタッフの活動は、テクニカルチームの関わり方に比べて、表面的には塔を建てることに直接関わりがないように見えるかもしれない。しかし、イベント企画がなければ真面目に練習することの繰り返しにしかならず、家族や友人のような繋がりをつくることは難しいだろうし（イベント企画）、遠方で行う実演では電車の切符購入や貸し切りバスの手配が必要であるし（必需品係・輸送手段管理担当）、また、広場に着いたらメンバーの荷物をまとめて入れておく袋が必要である（必需品係・荷物入れ担当）。街区部門のスタッフがそれぞれの担当で積極的に街区との関係を良好にすることにより、練習場である学校も快く使わせてもらえるし、街区内の色々な場を使う際に容易に協力が得られるだろう。更に、街区内の企業や商店などから活動資金もチームに提供される。このように、直接的な技術とは異なる形で人間の塔がスムーズに建つことを下支えするのがスタッフの仕事である。

別の視点、すなわち人間の塔に興味を持ち、練習の場を訪れた人を例にとってスタッフの活動を追っていきたい。その訪問者はまず、教育係に委ねられる。練習時サポートの教育係はAと書かれた腕章を

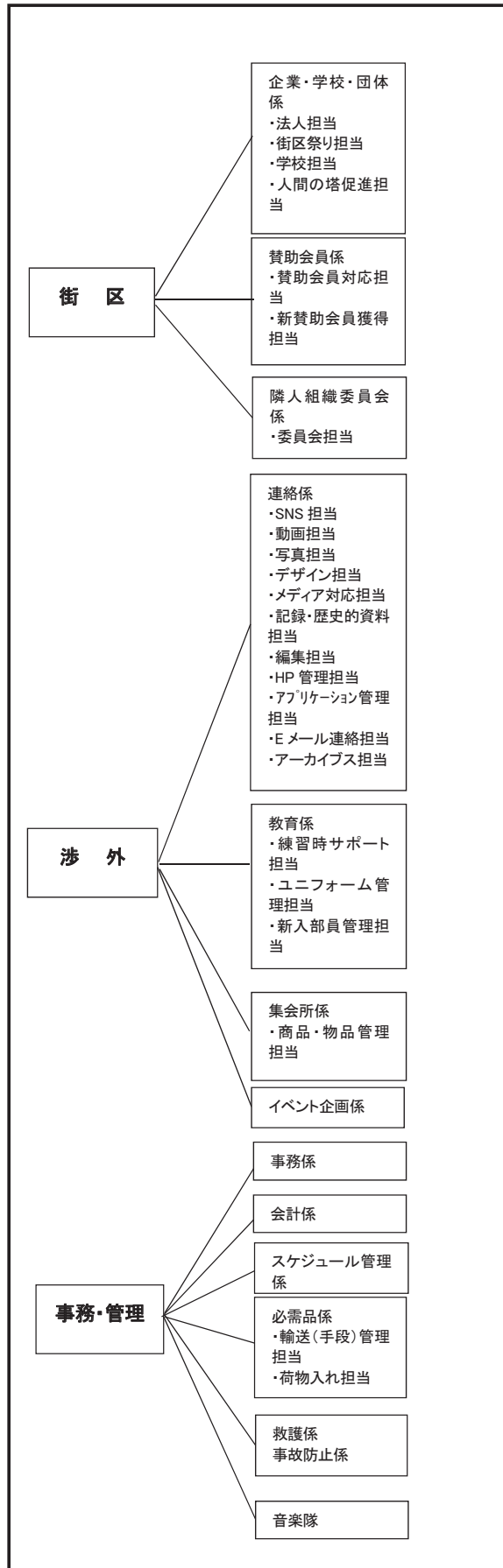


図7：サンツのスタッフの組織図概略

つけているのですぐに見つけられるし、オロオロしている参加希望者がいれば教育係の方からも声をかけることがある⁽¹⁴⁾。教育係は訪問者にサンツについて大まかな説明をし、貸し出し用の白色の腰巻を身に着ける手伝いをし、自主練の担当者に訪問者を託す。訪問者は自主練担当者の助言の下、背の高さ⁽¹⁵⁾によって適切な練習に参加し、また、全体練習でも塔の一部になることができる。白い腰巻は「初心者」の証でもあるので、全体練習で居場所がわからなくて、近くに教育係がいなかったとしても、必ずと言っていいほど誰かがどうしたらよいか声をかけてくれる。全くの素人でも思い立ったその日から塔の一部になれることは、人間の塔が他の伝統的なパフォーマンスと大きく異なる点であろう。練習の終わりには再び教育係が声をかけてきて、その日の感想を尋ねるが、練習の途中でも気に掛けられ、声をかけられているのが通常の訪問者の様子である。

練習が終わると訪問者は集会所で「一杯やらないか」と誘われる。スペインでは通常、アソシエーションが所有する（あるいは借りている）集会所にはバルが設置されていて、当該団体で購入した飲み物などが安価で会員に提供される。サンツもビールサーバーおよびキッチンが付いたバルが集会所内にあり、練習が終わると多くの人がビールを飲みながら、サンドイッチで簡単な夕食を済ませたり、歓談したり、カードゲームを楽しんだりして集会所で夜遅くまで過ごす。バルのメンテナンス、食料・飲料の調達、そして売上の管理などに関して、集会所係数人が裏で働いている。集会所に訪問者が残った場合、練習時とは異なるくだけたチームの雰囲気を感じることができ、歓談の際に気が合うメンバーと友達になることもある。

こうして訪問者が繰り返し練習に参加するようになると、準メンバーになるために登録する。登録の際には個人情報の他に、チームの備品である測りで肩までの高さを測り、登録票に記入する。そこから連絡係の担当者に電話番号が伝えられ、スペインで最も使われているチャットのアプリケーションWhatsApp上につくられた「白帯仲間 (Faixes Blancues)」というグループへ連絡係から招待される。既述の通り、白い腰巻は初心者の象徴でもあるのでこの名称がつけられている。正式メンバーになるまではこのアプリケーション・グループを通じ

て連絡事項が伝えられる。連絡事項でなくてもある程度の「お喋り」はこのグループ内で可能なので、白帯仲間同士で情報を交わし、知り合いになることもある。実際は、黒い腰巻はユニフォーム管理担当者から割合に早いうちに購入するので、準メンバーでも「黒帯」を着けている。ユニフォーム管理担当者は腰巻だけでなく、準メンバーや招待客などに与えられるTシャツ、正式メンバーにだけ与えられるシャツなどについても過不足がないように数量を管理している。メンバーが練習を行う練習場はマットやネットを使用したりしながら常に安全対策が施されている。事故防止係は練習場の管理のみならず、カタルーニャ人間の塔チーム機構 (Coordinadora de Colles Castelleres de Catalunya) の指導にしたがって、初心者講習会を設けて人間の塔の構造と安全面に関する知識を伝授する。

準メンバーは希望すればすぐにでも日祝日の実演に参加できるが、その際にはサンツに所属している証となるTシャツを着ていなければならない。通常教育係はその希望を尋ね、一番近い実演の機会に来られるよう、Tシャツを渡す。このTシャツも正式のシャツと同様に灰色が基調となっている。同色を基調とし、「サンツ」のロゴタイプが入ったTシャツは、外からでも一目で同じチームのメンバーだとわかることから、電車やバスに乗る際にも、一般の観覧客の立ち入りが禁止されている広場の入り口でも通行証の役割を果たし、サンツのメンバーであることをより意識する対象でもある。しかし同時に、準メンバーが正式メンバーでないことを痛感するのも実演の場である。これから建てる塔の中で自分の場所が決められていないことや、テクニカルチームのピーニャ担当者が最下層部分に空いてしまった空間を埋められるメンバーを慌てて探している時も、よほど体格に特徴がない限り、Tシャツ組でなく、シャツを着ているメンバーにまず目が行くことなどが、その例に挙げられるだろう。筆者も自分のポジションをアプリケーションの中から探そうと携帯電話を見ていた時、正式メンバーから「シャツをもらえるまでは、アプリに自分の名前は出ないわよ」と言われ、シャツ組とTシャツ組の地位の差を強く感じたこともあった。

こうした様々なプロセスを経て、ようやく正式なメンバーの証である灰色のシャツが、ある日突然、

準メンバーに与えられる。金曜日の練習の後に行われるテクニカルチーム・リーダーの話の際に名前が呼ばれ、皆の前でシャツが「授与される」のである。授与するのはテクニカルチームのリーダーであるが、その裏では、出欠状況や参加の仕方などについて、教育係とテクニカルチームの担当者たちが議論するという過程がある。人によって正式メンバーになれる期間は異なるが、インフォーマントへの聞き取りなどから2〜3ヶ月が一つの目安と考えられる。正式メンバーになると周囲から祝福される。購入不可能で、正式メンバーだけのものであるシャツは、単にサンツへの所属を意味するだけでなく、努力によって獲得した地位の証なのである。細かい話にはなるが、「授与」の後、教育係とユニフォーム管理担当者が新・正式メンバーのシャツのサイズを再チェックし、実際に体形に合ったシャツが手渡される。

正式メンバーになると連絡係からEメールが届き、サンツの携帯アプリケーションをダウンロードできるIDやパスワードが知らされる。ここで教育係の手を離れ、「白帯仲間」グループを卒業し、サンツの活動情報の全てを知ることができる地位を得る。チーム内での地位の移行は、特に他者から向けられる視線の違いで確認することができる。筆者も、正／準というメンバー間の違いがわからない練習の時に言葉を交わすようになった準メンバーが、実演を行う広場で灰色シャツ姿の筆者を見て少し驚き、「僕はまだシャツ組じゃあないから」「シャツ組で羨ましい」といった言葉を発する経験を何度かしたことがある。憧れも人間の塔に関わるモチベーションを上げる重要な要素である。「金銭で買えない」「時間と努力で勝ち取る」対象である灰色シャツは、サンツの塔をより高く、高度なものにする「仕掛け」と捉えることができるだろう⁽¹⁶⁾。こうして正式メンバーは、数としてはテクニカルチームの担当者よりも圧倒的に多いスタッフの予備軍に位置づけられていくのである。

4. 勧誘活動に「支えられる」人間の塔

より難度の高い人間の塔を建てるには、それだけ多くの人間が基層に必要である。例えば「3人の8段」という塔を建てる場合、幹となるトロンクに15

人、上層部の子供たちが4人乗るが、この塔を安定的に成功させるには約150人から成るピーニャが必要となる。したがって、人間の塔チームは基本的に外に対して開き、できる限り多くの人材を獲得することに常に奔走しなければならない (Iñigo, 2017, pp.18-19)。サンツの場合、毎年5月と10月に友人を連れてくる練習日が特別に設けられているが、それ以外にも見学や参加は随時受け付け、前節で見てきた通り、いつでも歓迎する準備が整えられている。

バルセロナにある7つの人間の塔チームの中からサンツを選んだ理由としてインフォーマントからよく聞かれる言葉が、「雰囲気良かったから」「皆んな親切だから」という答えであり、この理由が住まいの近くにある便宜性よりも重要な要因であることがわかる。逆に、入会当時は遠くに住んでいた者の中にも、容易に通えるようにわざわざサンツ街区に引っ越してくる者も散見される。その中には、毎日通う仕事場が遠くなった者もいる。ただし、サンツ街区にはサンツ駅があり、カタルーニャ内外へのアクセスに便利な点が有利に作用していることは予測される。しばらく他のチームに通っていたが、サンツと比較した上でサンツを選んだ者も少なくない。こうした経験を基にした比較から、「親しみ」「家族的」であることがサンツの特徴であり、他のチームとの差異性と理解することができるだろう。そのため、より難易度の高い塔を建てることに貢献したい者は、目的を同じくする「強いチーム」に移籍するだろうし、実際にそういったケースもあったという。

大人の勧誘に関しては、難易度の高い塔を建てる挑戦においてより多くのピーニャ要員を集めるという意図があるが、それだけであれば現在では練習に出てこない「幽霊メンバー」を召集すればよいだろう。普段の練習には来ない正式メンバーは、チームからわざわざ声をかけられなくても、大きな祭りや大会などには姿を現すことはよくある。しかし、人数を集めればよいというものではない。参加が自由な人間の塔の活動は、家庭や仕事あるいは学業の事情で、ある期間責任あるポジションに就くことができないメンバーも出てくる。重要なポジションを任せられる人材を常に育てる必要があり、そのためには新人の勧誘は必要不可欠なのである。

最も重要で安定的に獲得困難なのは、上層部3段を形成する子供たちである。中でも最も多くの代役を必要とするのは、特に上2段のアクチャドールとアンチャネータであろう。高い時には10mを超え、常に揺れ動いている塔を上る子供たちについては、身体的な能力や技術と恐怖に耐えられる性格のみならず、その時の気分や体調を考慮し、誰を抜擢するか判断しなければならない。技術だけを取っても、上ったり下りたりできればいいだけではなく、素早く、同時に、触れていると感じさせないように柔らかに動くことが塔を倒さない鍵であることを考慮しなければならない。上られる柱となる大人のメンバーからは、「○○ちゃんは掴まれている感じが全然しないね。」、「普通、男の子の方が女の子より乱暴だけど、△△君は男の子なのに上手に上り下りできるよね。」といった評価が聞かれる。また、「その時の気分や体調」まで考慮するとなると、常に同じ子供に任せるわけにはいかない。今日は好調と思った子供でも、遊びに熱中している途中で塔に上ることを要求されると、早く遊びに戻りたい一心で乱暴な動きをするかもしれない。塔が崩れて上から落ちたことがある子供が、本番を目の前に、急に上りたくない泣き出すかもしれない。子供の行動はともかく予測不可能なので、できる限り多くの子供を集め教育する必要がある。

子供たちの勧誘が優先課題であるもう一つの理由は、彼らが成長するということであり、そのスピードも予測不可能である点である。優れたアンチャネータやアクチャドールだとして常に出番が回ってきても、成長が早く、活躍期間が短い子供もいる。また、上から3段目の子供2人で形成するドススに抜擢したくても、その子に合う背の高さの子供が見つからない場合もある。

子供の勧誘は、まずは大人のメンバーの子供たちから始められるが、いくつかのイベントも用意されている。例えば、街区内のハイキング倶楽部と合同で行われる子供向けのイベントがある。ハイキング倶楽部の事務局内に設置されたボルダリング施設が開放され、同時にその屋外では腰巻をつけた子供たちが人間の塔を体験するといった内容のイベントである。子供たちは腰巻を着け、年齢や体格に応じて、肩の上に乗って立ってみたり、逆に自分の肩の上に

他の子供を乗せてみたりしながら人間の塔を体験する。ボルダリングをしに来た子供がサンツに入会する場合も、その逆の場合もあると言う。このような勧誘イベントは年に数回行われている。

子供の勧誘で注意すべきは、本人だけの問題ではない点である。親の付き添いが要求されるので、親の勧誘でもあることを視野に入れる必要がある。ある子供の母親は、「子供を安全に預けられる点が重要だった」と語ってくれた。サンツでは練習でも本番でも、子供はまず、テクニカルチームの子供担当者に預けられ、子供たちだけでその時間を過ごす。また、安全面には最大限の注意を払っていて、練習の前後に必ずストレッチを行い、必ずマットを敷き、子供たちにはヘルメット着用を義務付けている。また、彼らの「塔を建てられても、崩れることなく解体できなければ成功とみなさない」主義が子供を入会させるポイントともなる。親にとって子供の負傷が一番の心配事で、自分の子供をサポートし、受け止めるために自らもメンバーになった親もいる。

子供を入会させた親は通常、練習が行われる数時間の間、体育館で子供を見守っている。他の習い事とは異なり、やはり子供を見守っていないと心配だからだ。ずっと座っているだけの親に、ある日サンツのメンバーの誰かが「あなたもやってみない？」と声をかける。こうした切っ掛けで入会した現メンバーは少なくない。

このように、より高く、高度な人間の塔を建てるために必要な人材は、日々の勧誘によって獲得される。その鍵は、「親しみやすい」、「家庭的」といったチームとしての雰囲気の良いさと、チームが主義として守り、スタッフとテクニカルチームで実際に作り上げる安全性なのである。優先的に進めなければならないのは子供たちからではあるが、これまで見てきた通り、結果的に親である大人もメンバーとなることによって、家族がすっぽりチームに入り、家族的な雰囲気も継承されていく。それが、大人の勧誘から始まって、その子供（既に子供がいる場合も、後で産まれた場合も）がチームの一員になるという逆方向もあり得る。こうした緩やかなシステムがサンツには用意されていると言うことができるだろう。

5. おわりに

以上、人間の塔の成功／不成功に直接関わるテクニカルチームではなく、チームの社会的な側面に従事するスタッフの活動に着目し、サンツの民族誌を編んできた。そこからサンツの特徴あるいはエッセンスを捉えることができ、スタッフもテクニカルチームの担当者と同様に重要であることが把握できた。また、スタッフを入り口に、テクニカルチームも関わりながら、「灰色シャツの獲得を目指す」モチベーションづくりも実践していた。これは単なる準メンバーを引きつける上昇システムとしてのみならず、見習いから指導者への教育であり、ある種の人材獲得または育成でもある。さらにサンツの場合、居心地の良いチームの雰囲気（「親しみやすさ」「家庭的」）と安全性の提供が新メンバー獲得の鍵であり、そこにもほぼ自然にできあがった新会員獲得のシステムが働いていたのだった。

アソシエーションは一般に、個人の自由意思に基づいて共同の目的を実現するための集団と定義され、そこでは主体の自由と平等性が重んじられているが、実際につながりを維持し、集団としての形態を継続していく以上、その維持を可能にするシステムは問題にされるべきであろう。それがヒエラルキーである場合もあるだろうが、本研究で見てきたように、アソシエーションとしての本来の目的とは異なるが人々にとって大事な視点を考慮してみると、上下関係を極力排除し、親和的な関係性を基にした緩やかなシステムの存在が浮かび上がってくる。こうした緩やかなシステムは、人々に自然に備わる上昇志向や安全で心地よい居場所の選択といった「気持ち」（あるいは情動）を基に構築されているのだが、結果的に、より高度な人間の塔の完成につながる。すなわち、本来の目的を達成するのである。

冒頭の注で述べた通り、本研究は超域的な共同研究として進められてきた。その中で恐らく筆者独自で調査していたら視野に入らない人間の塔の構造を正確に理解し、安全性への対応の重要性にも着眼することができた。筆者が専門とする文化人類学は特に人と人との関係性からつくられるコミュニティや社会に着目するので、これまでであればインフォーマントと安全性をつなげるような思考を持たなかったように思う。インフォーマントとラポールを築く

べき現地調査のみならず、学問的慣習が全く異なる共同研究者との共同作業は、やはり他者理解を基本としているように見える。インフォーマントに対しては寛容だと自負してきたが、他分野に対してはどうだったか。反省する好機でもあったし、自らの立ち位置から一歩外へ踏み出してみる挑戦的な機会でもあった。

注

- 1 本研究は、人間総合研究センター研究プロジェクト「パフォーマンスを通じた「感動」の探求：人間の塔 (Castells) の多角的なエスノグラフィ構築の試み」(Cプロ) の成果の一部である。
- 2 カタルーニャを象徴する伝統的なパフォーマンスは人間の塔だけでなくサルダナー(sardana) も挙げられるが、フランコ政権時代の終焉後、急激に人間の塔チームが増え始め現在に至っている。詳しくは、ジオリ (Giori, 2014) やマルティ (Martí, 1994) を参照されたい。
- 3 本研究では人間の塔を「建てる」「建てられる」という表現を用いる場合が多いが、実際には人という建材を塔として積み上げ、完全に解体するまでが、「塔の完成」とみなされている。
- 4 本研究は、2015年から2019年の間、毎年10日～25日間の現地調査を2回ずつ行った際のデータを基にしている。
- 5 例えば身体にかかる体重を予測し、かかる力の方向を分析した「人間の塔：身体的限界への挑戦(Las torres humanas desafian a la física)」などのがある。
<<https://www.lavanguardia.com/vida/20161202/412314950318/torres-humanas-castells-desafio-fisica-leyes-peso-altura.html>> (2018年11月20日)
- 6 全く異なるコンテキストではあるが、本研究でも人材調達の維持システムを把握した際の分析の視点を採用し、特に新規メンバーの勧誘を考察していく (竹中 2015)。
- 7 一般的には「バレンシア人の踊り」を起源とすると言われているが、バイスで踊られていた踊りが既にバイス風であり、それが人間の塔であった可能性も検討されてる(Cevelló Salvadó, 2017, p.36)。
- 8 1990年代の人間の塔設立ブームについてボテージャは、ボランティア精神の復活、メディアによる注目、1980年代末に安全面を強化するため、法人格を有したカタルーニャ人間の塔チーム機構(CCCC) が設立されたことなど複数の要因が影響したと分析している (Botella, 2018, pp.314-324)。また、サンティスは、人間の塔のブームと危険を伴うスポーツの流行る時期が合致していると指摘する (Sentís, 1996, p.100)。
- 9 人間の塔をつくる集団は、ギャングや遊び仲間を表す「コージャ (colla)」(複数形では「コージャス(colles)」) と呼ばれるが、本研究ではわかりやすく説明するため、敢えて「チーム」と呼ぶ。また、人間の塔を構成する人々のことは「カステジェー(scastellers)」と称されるが、本研究では「(人間の塔)メンバー」と呼ぶことにする。
- 10 文献によってはアイチェカドル (aixecador) とも呼ばれるようだが、本研究では筆者がフィールドワークの時に最も聞いた表現のアクチャドルを採用している。
- 11 政治的な理由のみならず、経済の動向や社会変化によりアソシエーションイズムにも興隆と衰微が見られる。アソシエーションの動向についての詳細は、Albenich Nistalを参照されたい。
- 12 ここではわかりやすく「自主練」と称しているが、厳密にはメンバーの中で「自主練」担当のコーチ役がいて、彼らの指導の下で練習が行われる。自主練は、体育館の壁とそこに設置されたバーを使って行われる。つまり、体育館の端の方で自主練習は進められる。
- 13 スマホのアプリケーションを使用する前までは、体育館に到着すると自分の名前が書かれたマグネットを「出席者」の場所に移動し、それを各部位のリーダーが、図6と同じようなポジションの枠が予め書かれた白板に貼り付けていた。
- 14 筆者が訪れたことがある他のチームでは、サンツの教育係が迎え入れる方法とは異なり、「興味がある人は黄色いシャツを着た者に声をかけてください」といった看板がかけられているだけであった。しかも、黄色いシャツの人は見当たらなかった。
- 15 後述の通り、正確には肩までの高さ。
- 16 筆者の調査では、シャツを買うことができるチー

ムもあったので、サンツにおけるシャツ獲得までのプロセスは注目に値するだろう。

引用参考文献

- Albenich Nistal, Tomás (2007). Asociaciones y Movimientos Sociales en España: cuatro décadas de cambios, *Revista de Estudios de Juventud* N°76, pp.71-89.
<<http://www.injuve.es/sites/default/files/Revista-76-capitulo-4.pdf>> (2019年10月9日)
- Almirall, Josep (2011). *Castells. Torres humanes: tocando el cielo con la mano*, Barcelona: Triangle Postals.
- Botella, Miquel (2018). *Castells: una història d'èxit*. Barcelona: Galàxia Gutenberg.
- Català i Roca, Pere (dir.) (1981). *Món casteller*. Barcelona: Rafael Dalmau editor (2v).
- Cervelló Salvadó, Àlex (2015). *Els Xiquets de Valls durant el primer franquisme (1939 – 1960)*, Valls: Cossetània.
- Cervelló Salvadó, Àlex (2017). Valls, bressol dels castells. Els primers anys del segle XIX, *Enciclopèdia Casteller. Història I: dels antecedents al 1939*. Valls: Cossetània.
- Giori, Pablo (2014). Les etapes del món casteller – Construcció d'un món i de les lògiques del seu funcionament–, *Revista d'Etnologia de Catalunya* Núm 39, 160-167.
- Iñigo, Benet (2017). *Pit i amut!*, Barcelona: Columna Edicions.
- Martí, Josep (1994). The Sardana as a socio-cultural phenomenon in contemporary Catalonia, *Yearbook for Traditional Music* 26, 39-46.
- Martí, Josep (2017). Patrimoni immaterial: l'esmunyedissa lleugeresa d'una idea, A. Ramis Puig-gròs (ed.), *El patrimoni immaterial entre la revisió i la descoberta*, Palma de Mallorca: CAGB, 149-166.
- 中村節子 (2005). 「バルセロナの都市祭礼『メルセ祭』と祭祀集団の役割についての分析」『生活学論叢』10巻, 75-83.
- Rebollo Sánchez, Alexandre (2017). Fer l'aleta, el Museu Casteller de Catalunya a Valls i el procés de patrimonialització del fet casteller, *Revista d' Etnologia de Catalunya* Núm 42, 323-333.
- Sentís, Eva M. (1996). Por i perill: vivències dels castellers. *Revista d'Etnologia de Catalunya* Núm 9, 100-115.
- 竹中宏子 (2014). 「スペインの民俗文化研究—人類学における民俗学の位置づけ—」『文化人類学研究』15巻, 33-43.
- 竹中宏子 (2015). 「キリスト教巡礼におけるホスピタリティの現在—サンティアゴ巡礼の巡礼宿とオスピタレロに着目した人類学的研究」『観光学評論』Vol.3-1, 17-33.
- Weig, Doerte (2015). Sardana and castellers: moving bodies and cultural politics in Catalonia, *Social Anthropology* 23/4, 435-449.
- 山道佳子 (2015). 「カタルーニャの道」『季刊民族学』152, 6-19.